

令和元年6月17日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770295

研究課題名(和文)ピースワークの人類学的研究 中央アジア南部の刺繍づくりからみる女性の生活戦略

研究課題名(英文)The Anthropology of Piecework: women's life strategy through embroidery in Southern Central Asia.

研究代表者

今堀 恵美 (Imahori, Emi)

東海大学・文化社会学部・講師

研究者番号：50600821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：期間中の研究内容はウズベキスタンへの研究出張2回、収集資料の整理と理論研究である。本研究の主な成果はウズベキスタン大統領交代後のピースワーク労働をめぐる実態解明である。本研究が焦点をあてた刺繍業では、新政権下で実施された観光用の土産物を制作する工芸家の支援策 具体的には大幅な免税やマイクロクレジットの拡充 がピースワーク労働者を事業家として独立させる結果をうみ、賃労働や失業者を減少させたことが観察された。だがその反面、事業家増加によって価格競争が生まれ、高い技能をもつピースワーク労働者よりも安価に請負する労働者が優遇され、工芸品の質の低下が生じるという悪循環も生じていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では新自由主義下で不安定雇用とみなされがちなピースワーク(請負労働、内職)に着目し、ものづくりでの位置づけの見直しを図ってきた。ものづくりをめぐる従来型の理論では制作責任者(工芸家や職人など)の活動を創造力やオリジナリティといった点から重視し、内職の作業を単純加工として軽視する傾向にあった。本研究の意義はピースワーク労働者をもつ高い技術と制作責任者の統括双方の重要性を浮き彫りにするよう試みた点である。ウズベキスタンの刺繍業と近年の観光化政策を事例とした研究成果から、独立事業家の増加を促進する工芸家支援策でピースワーク労働をめぐる環境が悪化し、工芸品の質低下が生じたと指摘された。

研究成果の概要(英文)：During the research period, I conducted two field research in Uzbekistan. Furthermore, I was trying to analysis collected data in fieldwork and engaged in theoretical research. The main outcome of this study is the elucidation of the actual situation surrounding piecework labor after the change of President in Uzbekistan. Under the new governments, the policy to reinforce tourism were implemented. In Uzbek embroidery had been observed by this study, new policy to support craftsmen who produce souvenirs-specifically, tax exemptions and micro-credit loan system-could reduce pieceworkers and unemployed people because of making them independent as business owners. However, on the other hand, there is a vicious side that been favored pieceworkers who contract at a lower price than highly skilled workers, as result of price competition created by the increase of independent businessmen.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 中央アジア ウズベキスタン ものづくり ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

ユーラシア大陸の中心に位置する中央アジア南部は古くからシルクロードとして名高い東西交易が展開され、人・もの・情報の行き来が盛んであった。古代中央アジアの交易品は、美術史、考古学、歴史学の分野で多角的に研究されている一方、現代中央アジア諸国における工芸およびものづくりの実態、特に制作者たちの社会関係、生活戦略に着目した文化/社会人類学(以下人類学)研究は決して多いとはいえない。なかでも1991年のソヴィエト社会主義共和国連邦(以下ソ連)崩壊後の社会変動期が中央アジア女性のものづくりに与えたインパクトについて本格的に研究した人類学的研究は筆者の研究のみであった。筆者の研究が注目するのは中央アジア南部の刺繍づくりである。刺繍はイスラーム圏である中央アジア南部の女性が結婚までに準備する持参財として制作されてきた。19世紀末から20世紀初頭の中央アジアの刺繍について、Sukhareva, O.A., 2006 Suzani : Sredneaziatskaya Dekorativnaya Vyshivka. Moskva : Izdatel'skaya, Firma Vostochnaya Literatura RAN.で刺繍技法、用途や種類、モチーフの象徴的意味の研究がなされていたが、社会変化と工芸の関係、なかでも制作者による刺繍の事業化への注目はなされていなかった。申請者の研究は市場経済化と刺繍の事業化の関係解明に重点をおき、ソ連期以前からソ連期、ソ連崩壊後の独立時代といった3つの時代の変化のなかで、イスラーム規範のなかに生きる制作者女性およびその家族たちが、民族文化の刺繍をつうじて、主体的なものづくりや経済活動を実現させ、新たな家族・親族関係を形成していく過程を明らかにした。上記の研究成果は2008年に博士論文として東京都立大学に提出している。

申請者が博士論文を執筆する過程で、刺繍事業を運営する制作責任者兼事業家女性に焦点を当てることが多く、ピースワーク(下請け)として刺繍づくりに携わる女性たち(刺繍ぬい子)の生活戦略を十分に把握できていないことを痛感した。刺繍づくり全体を俯瞰すると、ピースワークで制作を担う女性たちが圧倒的多数を占める反面、事業家女性に比べ不安定な立場で制作に携わっていることが分かってきた。ピースワークという理論的視座をもつことで、中央アジアばかりではなく日本を含む世界中の手工芸で働く下請け制作者たちが高度な技能を有するにもかかわらず、「単純作業」と低く見積もられる共通した問題点も見えてきた。国際比較の視点に立ったピースワーク従事者の見直しは、高度な技能を有する人材育成に取り組む我が国にとって、従来のもので見過ごされてきた潜在的な可能性を引き出す契機を与えるはずである。本研究では、申請者がこれまで従事してきた中央アジアの刺繍づくりをピースワークという新たな視点から捉え直し、下請け制作者のものづくりの実態と生活戦略について理論的かつ実証的に解明する。

## 2. 研究の目的

中央アジアの刺繍づくりに携わるピースワーク従事者の実態解明に向けて以下の二点から考察する。

(1) 中央アジア南部における刺繍ぬい子の生活戦略をめぐる民族誌的研究。中央アジアの刺繍ぬい子たちは事業家から受注し、刺繍品を完成して賃金を受け取るピースワークの典型である。これまで調査したウズベキスタン中部の刺繍ぬい子にくわえ、中央アジア南部の他の諸都市(ウズベキスタンおよびタジキスタン)のぬい子女性にもインタビュー調査を実施し、多角的に刺繍づくりの実態を把握する。具体的には刺繍づくりの技能、その習得法、刺繍づくりから得る収入の平均金額とその用途、生活における時間割り振りや刺繍にあてる時間数、季節ごとの仕事量の差、他の手工芸に従事する割合、世帯主との収入差、年金支給対象となる仕事との関係、仕事をめぐる家族の理解度に関するデータを取る。刺繍ぬい子女性の制作状況を明らかにした上で、「刺繍制作者」である事業家女性との対比をつうじ、ピースワーク従事者の制作活動の特色、固有の問題点、それを乗り越える生活戦略の多様性を浮き彫りにしたい。

(2) ピースワークをめぐる法制度、文化、ジェンダーおよび宗教規範をめぐる理論研究。ピースワークとは一般に「請負」「下請け」をさすが、同じ仕事内容に従事していても捉え方は地域ごとに全く異なる。たとえば日本では「請負業」は契約に基づく事業受託者を指す場合が多く、本研究で考察対象となる手工芸における下請け業は一般に「内職」と呼ばれる。日本の家内労働法における内職の定義は専業か否か、家計の主たる担い手が補助者か、男子世帯主か老婦女かといった基準が重視されていることからみても、ものづくりにおける下請け業の社会的位置づけは当該地域の法制度、または法制度を規定するに至った仕事をめぐる文化やジェンダー、宗教的規範が大きな影響を与えていることが分かる。本研究では通文化的なピースワークという人類学理論の整理を試みると同時に、刺繍ぬい子の制作活動のあり方に影響を与える中央アジアの仕事をめぐる法制度、文化、ジェンダー規範、イスラーム規範を文献研究および関連機関への聞き取り調査と合わせて解明したい。

## 3. 研究の方法

実証研究では主にウズベキスタン、タジキスタンといった南部中央アジア諸国の刺繍制作地域において参与観察、インタビューに基づく社会人類学的フィールドワークを実施した。理論研究では文献調査、資料収集および関係諸機関へのインタビューを併用した。

#### 4. 研究成果

研究開始当初の2014年では体調不調によって現地調査が実施できなかった。翌年の2015年夏に筆者の妊娠が明らかになり、高齢出産であることを鑑みて海外出張を伴う現地調査を実施できなかった。2016年2月に出産を経験した。しかし当時非常勤講師であったこと、採用予定であった東海大学で出産に伴う本採用の延期などを経験したことから、2016年の所属は首都大学東京における無給の研究者とならざるを得なかった。むしろその際に無給であることから本来認められている科研費における育休の申請も行うことができなかった。したがって出産育児を経験しながらも研究期間を中断できず、継続せざるを得なかったのが2016年の状況であった。2017年に東海大学で特任講師の採用となった後、本来の研究活動に従事する環境が整備された。したがって2014年から2016年までは実質研究活動が思うように実施できなかったといわざるを得ない。これが当初の予定よりも大幅に研究ペースが落ちてしまった理由である。だが研究期間の延長を許可していただき、2018年まで研究活動に従事した結果、ウズベキスタンの新政権のもとで実施された観光化政策と刺繍業におけるピースワーク労働の関連性を解明することができた。それは観光サービス充実のために観光用の土産物を制作する工芸家の支援策 具体的には大幅な免税やマイクロクレジットの拡充 が新政権によって打ち出された。それがそれまでのピースワーク労働者を事業家として独立させ、賃労働や失業者を減少させる結果を生んだことは評価しうる。だがその反面、事業家として起業した人々が増えたことによって価格競争が生まれ、高い技能をもつピースワーク労働者よりも安価に請負する労働者が優遇される事態を生んでしまった。その結果、全体として工芸品の質の低下が生じるという悪循環も生じていることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

今堀恵美「プハラ州村落部の刺繍制作者にみる工芸家支援策について 文化人類学的インタビュー調査の事例から」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』No.1029, 2018:39-49.

今堀恵美「人類学的フィールドワークからみるウズベク女性の刺繍づくり」『東海大学紀要文化社会学部』1, 2018:151-163.

Emi Imahori "Halal Food Production and Self-Restrictions in Uzbekistan: Diversity in Interpretation of Halal" 『文明研究』, 2017年, 165-192 ページ。

今堀恵美「社会主義とイスラームの狭間で ポスト社会主義後ウズベキスタンにおける豚の流通をめぐる調査報告」佐々木史郎・渡邊日日(編)『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界 比較民族誌的研究』風響社、2016年、151-178 ページ。

今堀恵美「「見えない仕事」、「見せない仕事」 ウズベキスタンの刺繍業における男性性」中谷文美・宇田川妙子(編)『仕事的人类学 労働中心主義の向こうへ』, 世界思想社、2016年、25-45 ページ。

〔学会発表〕(計 1 件)

今堀恵美「ウズベキスタンとカザフスタン：ハラールへの対極的な対応」日本中東学会(東京国際大学) 2014-05-11

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。